

国際都市上海—社会的文化的総合研究

Shanghai: An Interdisciplinary Study of a Cosmopolitan City

総括研究員：藤原康晴

分担研究員：桂川光正 大川俊隆 倉橋幸彦 村田好哉（全員教養部）

1993年度は、秋期より定期的に研究会を開催したが、その発表者と題目は以下の通りである。

藤原康晴「上海における中国革命」

桂川光正「上海租界における日本人」

村田好哉「芥川龍之介・横光利一と上海」

倉橋幸彦「1920年代の上海の出版」

大川俊隆「羅振玉の上海における活動について」

藤原の研究は、〈五・四運動〉以後から〈解放〉までの上海の役割を研究するものであるが、その中でも特に、上海の民族資本家の動向について注目せねばならないと考えたものである。

桂川の研究は、19世紀後半から1930年代までの、上海における日本人社会の形成と特徴をさぐろうとするもので、この時期の上海在留日本人数とその職業の変遷を検討して、いくつかの大きな傾向を把握するに至ったものである。

村田の研究は、芥川の旅行記『支那遊記』等に基きながら、会見した数人の中国人の中でも、「新人」李人傑に着目されていることに、芥川のジャーナリスト的才能をさぐろうというものである。

倉橋の研究は、上海租界における上海人の購読力と購売力という点を中心に、上海の出版状況について調査を行ったものである。併せて、20年代後半より大量に発行された『小報』を中心に当時の出版の特徴についても考察を試みている。

大川の研究は、前年度の『庭聞憶略』に基く、上海時代の羅氏伝記の研究を踏まえて、更に具体的な、羅氏の活動について追求を進めたものである。即ち、1897年に創刊され、その後の10年間、羅氏の活動の中心となる『農学報』についてその発刊の経緯と発刊後の活動の資料を収集し、併せて、羅氏の農学への思想的立場の解明へも入ってゆこうとするものである。

なお、昨年度は臨時に藤永壮氏の参加を得て、「上海における従軍慰安所」との題目で研究発表をして頂いたが、今年度より藤永氏も本プロジェクトへの正式参加が予定されている。

更に、本プロジェクトにおける各人の研究テーマの解明に資するため、3月12日より15日にかけて、上海研修旅行も行ったが、その参加人員は、大川俊隆・桂川光正・倉橋幸彦・村田好哉・藤永壮であった。